

「シ」を用いた原因・理由表現について

堀池尚明

キーワード：助詞「シ」、原因・理由表現、共起関係、並列、文的独立性

要 旨

本稿では、「シ」を用いた原因・理由表現が文として自然に成立する条件を、「カラ・ノデ」と比較しながら見ていく。特に後句の特徴を中心にしながら、前句と後句との共起関係に着目すると、以下のことが指摘できる。

まず、(1)後句がモダリティに関わる表現の場合、基本的には「シ」の文が成り立つが、相手への行為要求表現の場合には「シ」の文が成り立ちにくい。(2)後句が確定的な事態の描写的叙述になっている場合、無意志的な事態の叙述であれば、「シ」の文は成り立ちにくくなるが、意志性のある事態の叙述であれば「シ」の文が成り立つ。ただしその場合でも人称は一人称の方が自然である。(3)後句が話し手の感動や詠嘆を表しているような場合、「カラ・ノデ」よりも「シ」を用いた文の方が自然である。

そして最後に、これらの共起関係が「シ」の持つ並列性と文的独立性の高さに起因するものであるということを指摘する。

1. はじめに

助詞「シ」を用いると、次のように並列関係を表したり、因果関係を表したりすることができる。

- (1) a 彼は歌も歌うし、ギターも弾く。
b 夏は蒸し暑いし、冬は凍りつくように寒い。
- (2) a もう遅いし、そろそろ帰ろう。
b お金もなかったし、一番安いのにした。

「シ」に関する研究は、ほとんど用法の分類を中心にしており、それぞれの用法の具体的な特徴にまでは及んでいない。

そこで本稿では、「シ」の用法の中で、(2)のような原因・理由を表しているものを取り上げ、それがどのような特徴を持っているのかを考察していく。具体的には、原因・理由表現の代表形式である「カラ・ノデ」を比較対象として取り上げ、「シ」を用いた原因・理由表現が文として自然に成り立つ条件を、前句に対してどのような後句が共起するのか、ということに着目しながら見ていくことにする。そして最後に、どうしてそのような共起関係が生じるのかを考えてみることにする。

2. 先行研究

「シ」について先行研究では、以下のようなことが言われている。

- (a) 張(1994)によると、「シ」の用法は、前句と後句が交替できるか否かによって、「並列関係」、「単純接続」、「累加関係」、「因果関係」の4つに分類できるとしている。「並列関係」と、「単純接続」で前句・後句の事柄が無関係になっているものは前句と後句が交替できるが、「単純接続」で話題の転換をしているものや「累加関係」、「因果関係」は前句と後句が交替できない^{注1}。
- (b) 「シ」を用いた因果関係表現は、他にも原因や理由があるということを暗示させ、婉曲的なニュアンスを持つ^{注2}。
- (c) 階層構造という観点から、南(1974)(1993)は「シ」をC類に位置付けている(なお、「カラ」はC類、「ノデ」はB類である)^{注3}。

(a)に関しては、助詞「シ」の用法分類でしかありえず、「シ」には幾つかの用法があって、その中には原因・理由を表すような用法もあるのだと、その用法の存在を指摘しているだけに過ぎない。つまり、それだけでは「シ」の原因・理由を表す用法の特徴を具体的に十分に捉えきえることはできないのであって、他の原因・理由を表す接続形式と比較することによって、さらに一段とその特徴が明らかになってくるはずである。そこで本稿では、原因・理由表現の代表形式である「カラ・ノデ」を比較対象として取り上げて、「カラ・ノデ」と置き換えられるかどうかを見ながら考察を進めていくことにする^{注4}。

(b)に関しては、確かに他の原因・理由表現の形式との比較の上で言えることなのではあるが、それはニュアンスを捉えただけであり、それだけではまだ「シ」を用いた原因・理由表現の特徴を十分に捉えきれているとは言えない。文法的、機能的な観点からの考察も必要になってくる。

(c)についてであるが、南のA類、B類、C類といった従属句の分類は、そもそもその従属句の内部構造にのみ着目してなされていった分類に過ぎない。つまり、従属句内部にどういった要素が現れているのかを考察し、その要素の現れ方の違い(現れる要素の種

類の多さ)によって三分類したもののなのである。あまり多くの種類の要素が現れることのないもの(現れる要素の種類に制限のあるもの)をA類とし、ほとんど制限なくより多くの要素が現れ得るものをC類とし、A類とC類の中間のものとしてB類を設定している。

南によると、「シ」はC類であり、「シ」の従属句内部には、主題の「ハ」、「タブン・マサカ」の類いの陳述副詞、「マイ、ダロウ、ウ、ヨウ」の助動詞などが現れることができるとしている。これは、あくまで従属句内部での文法的特徴であり、関わりのある主文の文法的特徴には触れていない。確かに南は南(1993)で主文の述部の文法的特徴に関する制約も考察しているが、原因・理由表現の形式の中で具体的に考察対象としているのは、「カラ」と「ノデ」と「テ」だけである。「シ」も「カラ」と同様のC類であるし、南も一応の結論としてC類の従属句は主文の文法的特徴を制限しないと主張しているのだから、「シ」も「カラ」と同じような特徴が見出されるはずであるが、果たして「シ」も「カラ」も同じであるのかどうか、具体的に見ていく必要がある。そこで本稿では、「シ」の文の特に後句に着目しながら、前句に対してどのような特徴を持つ後句が共起するのか、その共起関係を具体的に見ていくことにする。

3. 「シ」の文の前句と共起する後句および共起しない後句について

後句に着目しながら、「シ」はどのような場合に使えて、どのような場合に使えないのかを見ていく^{注5}。

3.1. 後句がモダリティに関わる表現になっている場合

3.1.1. 事態をめぐっての判断

後句が事態をめぐっての判断を表している場合、具体的には認識的判断や当為的判断、評価・感情、意志・希望を表している場合、「カラ・ノデ」の文は自然な文として成り立つが、「シ」の文はどうであるのか。

まず、後句がエピステミックな認識的判断を表している場合、「シ」の文は「カラ・ノデ」と同じように自然な文として成り立つ。

- (3) a 夕方の帰宅ラッシュ時だ|し/から/ので、彼女の到着は遅くなりそうだ。
- b ポストに郵便物が溜まっている|し/から/ので、彼らは留守かもしれない。
- c この前のテストで100点取っていた|し/から/ので、あいつはきっと天才だ。
- d 〱お前来るかと一升買って待ってたよ

 あまり来ないのでコラサノサ 飲んで待ってたよ

 という俗謡の一節を聞いても私は食べるのがどれほど大切であったかを考える。
この歌の場合は“一升”と言っているのだからきっと酒だろう。だが、酒も食べ物

- の一種だし、酒があるなら多少の肴も用意してあるだろう。(「食卓」・159ページ)
- e 「ご主人が留守では大変ですね。お手伝いすることがあれば何でも言って下さい」
「ありがとうございます。主人も明後日には帰りますし、大丈夫だと思いますわ」
(「死者」・154 ページ)
- f そういえば、この家には十二、三歳の娘さんがいるんだっとな、目鼻立ちもしっかりしてるし、いい器量になるぞ、などと思いながら、ごま塩かけて食べた、いとおかし。
(「食卓」・220 ページ)

また、後句が、ある事態が義務付けられて述べられているような場合、すなわち、ディオンテックな当為的判断を表している場合も、「シ」の文は自然な文となる。

- (4)a もう時間だし／から／(な)ので、行かなければならない。
b 彼はもう相当年を取っているし／から／ので、そろそろ引退すべきだ。
c あの子は偉い人だし／から／(な)ので、しっかり挨拶しておいた方がいい。
d この部分に関しては、まだ調査も十分に進んでいないし／から／ので、我々
の手で明らかにしていく必要がある。
e 「佐和子ったら、まだ泳いでいる。いい加減に上がればいいのに。もうすぐ美奈も
来る時間だし、シャワーを浴びて着がえをしなくちゃ」(「シングル」・16ページ)

後句が評価を表していたり、感情を表しているような場合、具体的には形式として評価形容詞や情意形容詞が使われている場合も、「シ」の文は自然に成り立つ。

- (5)a あいつは何やってもうまく出来るし／から／ので、うらやましい。
b 周りの迷惑になるし／から／ので、それはだめだ。
c 皆いなくなっちゃったし／から／ので、寂しいな。
d このワープロはインターネットまでできるし／から／ので、非常に便利だ。
e 「しかし、私は、大声で、危ないから開けるなって、怒鳴ったんですよ。なぜ、あいつは、いうことを聞いてくれなかったんですかね」
それがわからないし、残念だという顔を西本はしている。(「ひかり」・42ページ)

さらに、後句が意志や希望を表している場合も、「シ」の文は許容される。

- (6)a もう遅いし／から／(?)ので、そろそろ帰ろう。
b 雨が降っているし／から／(?)ので、出掛けるのは止めよう。
c 時間もまだまだあるし／から／ので、どこかに行きたい。

d そんなのは面倒くさい{|し／から／|}ので、絶対にやりたくない。

e 「わたしは、この身体で旅も出来ないし、ここに残って、運命に従います」

（『主婦と生活』1949・7月・46ページ）注6

以上のように、後句が認識的判断や当為的判断、評価・感情、意志・希望を表している場合、すなわち事態をめぐっての判断を表している場合、「カラ・ノテ」の文と同じように、「シ」の文も自然な文として成り立つのである。

3.1.2. 相手に対する行為要求

3.1.1節で見てきた考察からすると、後句がモダリティに関わる表現になっている場合、「シ」の文は何の問題もなく使われ、モダリティの制約は特にないように思われる。

ところが、後句が、相手に対する行為要求を表しているような場合、つまり、命令や禁止、依頼などを表しているような場合には、「カラ・ノテ」の文と比べると、「シ」の文は幾分不自然な感じの文となってしまう。

(7)a うるさい{|??し／から／(?|}ので、静かにしろ。

b ちょっと今片付けている{|し／から／(?|}ので、まだ部屋に入って来ないで。

c 虫入って来る{|し／から／(?|}ので、窓閉めて。

d お菓子なくなっちゃた{|し／から／(?|}ので、コンビニで何か買ってきてくれない？

e おーい、危険な薬品とかある{|??し／から／(?|}ので、そこには近づくな。

f あとでおこづかいあげる{|*し／から／(?|}ので、肩をたたいてよ。

g すぐに戻って来ます{|*し／から／|}ので、少々お待ちください。

だが、次のような文は(7)に比べれば、判定が微妙ではあるが、多少自然に感じられる。

(8)a 明日は大事な選挙だ{|(?)し／から／(?|}(な)ので、必ず投票に行けよ。

b 近所迷惑になる{|(?)し／から／(?|}ので、もう少しボリュームを絞りなさい。

c そんなにお金もかからない{|(?)し／から／(?|}ので、心配するな。

d 虫歯になる{|(?)し／から／(?|}ので、甘い物を食べるのはやめなさい。

e 親も寂しがっている{|(?)し／から／(?|}ので、早く帰って来い。

さらに、前句の述語が「ノダ」になっていると、文としての許容度は格段に上がる注7。

(9)a もう大人なんだ{|し／から|}、もっとしっかりしなさい。

- b 時間ないんだ |し/から|、いつまでもぐずぐずしてるな。
- c 風邪ひいてるんだ |し/から|、ちゃんとじっとして寝ている。
- d せっかく作ったんだ |し/から|、食べてよ。
- e みんなも待ってるんだ |し/から|、早く行ってあげなさいよ。

(田野村(1990a)・112 ページからの引用)

このように、同じ行為要求の表現であるのに、「シ」の文が不自然に感じられる場合と自然に感じられる場合がある。

(7)も(8)も(9)も、相手に対する行為要求を表しているという点では同じであるが、(8)や(9)の方では、相手に対して「こうしなければならない」「こうすべきだ」というふうに行為を当為の方向に規定化させながら、行為を要求しているような表現になっており、むしろディオントックな表現性が強く感じられる^{注8}。3.1.1節で見たように、後句がディオントックな当為的判断を表している場合、「シ」の文は自然な文として成り立ったわけであるから、相手への行為要求表現にディオントックな表現性が強く感じられれば、「シ」の文は自然な文として成り立つのである。

その他に、相手に行為を要求しているような表現には、勧誘や提案があるが、これらが後句に表現されている場合は、「シ」の文は自然な文として成立する。

まず(10)は勧誘の表現である。

- (10)a 外は寒い |し/から/ (?) ので|、今日は家でじっとしていきましょう。
- b 天気がいい |し/から/ (?) ので|、どっか出掛けましょう。
- c 時間ない |し/から/ (?) ので|、急ごうぜ。
- d さあ、全員集まった |し/から/ (?) ので|、そろそろ始めよう。

次の(11)は提案表現の場合である。

- (11)a 部屋散らかってる |し/から/ (?) ので|、片付けたらどう？
- b もう遅い |し/から/ (?) ので|、そろそろ帰ったほうがいいよ。
- c 時間もまだまだたっぷりある |し/から/ (?) ので|、挑戦してみたら？
- d いろいろと面倒くさそうだ |し/から/ (?) (な) ので|、止めたほうがいいんじゃない？

(10)や(11)は確かに相手に対して行為を要求しているのではあるが、それは二次的な表現効果であって、本質的には(10)の勧誘表現は一人称領域での意志が基盤となっている表現であるし、(11)の提案表現は、話し手の意見、しかもディオントックな意味を帯

びた話し手の意見を、相手に向かって提示することを基本とするような表現である。つまり、(10)や(11)のような勧誘や提案は、話し手の事態をめぐっての判断なのであり、本質的には相手への行為要求表現ではなく、(7)のような純然たる行為要求表現とは異質なものと考えられるのである。

以上見てきたように、相手に対する行為要求の表現には、そもそも「シ」は馴染みにくいものである、ということになる。ただ、ディオントックな表現性が感じられたり、勧誘や提案のような表現になっている場合には、「シ」の文は自然な文として成立するのである。

3.1.3. まとめ

後句がモダリティに関わる表現になっている場合をまとめると、認知的判断や当為的判断、評価・感情、意志・希望を表している場合、すなわち事態をめぐって話し手の判断を表している場合には、「シ」の文は「カラ・ノデ」の文と同じように自然な文として成り立つのであるが、相手への行為要求を表している場合には、「カラ・ノデ」の文とは違って、そもそも「シ」の文は自然な文としては成り立ちにくい、とまとめることができる。

3.2. 後句が確定的な事態の描写的叙述になっている場合

次に、後句が確定的な事態の描写的叙述になっている場合、「カラ・ノデ」の文は問題なく自然な文として成り立つが、「シ」の文はどうであるのかを以下で見ていくことにする。

- (12)a 乱暴に扱った{??し／から／ので}、壊れてしまった。
- b 寝坊した{??し／から／ので}、遅れました。
- c もともと知名度もあった{??し／から／ので}、選挙に当選した。
- d あの町は交通の便がよくなった{??し／から／ので}、人口が増えている。
- e 子供が無事に就職した{??し／から／ので}、彼の機嫌が良い。
- f 通り魔もよく出没する{??し／から／ので}、この道を通る人は少ない。

(12)は後句が無意志的な事態の叙述や状態性の事態の叙述になっているが、この場合「シ」を用いて原因・理由表現の文にしようとする、かなり不自然な文になってしまう。それでは、後句が確定的な事態の描写的叙述になっている場合、そもそも「シ」の文は成り立ちにくいのかというと実はそうではなく、次のような意志性のある事態の叙述であれば、「カラ・ノデ」の文と同じように「シ」の文も自然な原因・理由表現の文として許容されるのである。

- (13)a 時間がなかった{し／から／ので}、そこには立ち寄りなかった。

- b あれはもうボロボロだった{し/から/ので}、捨てちゃったよ。
c 主張もしっかりしてた{し/から/ので}、彼に投票した。
d 体に良くない{し/から/ので}、タバコをやめた。
e 体格もいいし、連れてきた。 (張(1994)からの引用)
f 群(略)。二十五、六ぐらいの時は、結婚なんかしなくなっただけいいわよとか言っていたんですが、だんだん不憫になってきたらしいんですね。うちは二十歳の時に両親が離婚してまして、母親は、私はこういうふうになっちゃったけども、娘にはそういう思いをさせたくないというのが働いちゃうらしくて。私は自分の仕事でこれからどうなるかわからないし、ぜんぜん耳を貸さず、親の意志を無視してましたが。 (「解体新書」・266ページ)

ただし、このような意志性のある事態の叙述であっても、「シ」の文では、人称は一人称の方が自然なようである^{注9}。

- (13)' a 時間がなかったし、私はそこには立ち寄らなかった。
a' (?)時間がなかったし、彼はそこには立ち寄らなかった。
b あれはもうボロボロだったし、俺捨てちゃったよ。
b' (?)あれはもうボロボロだったし、あいつ捨てちゃったよ。
c 主張もしっかりしてたし、私は彼に投票した。
c' (?)主張もしっかりしてたし、彼女は彼に投票した。
d 体に良くないし、僕はタバコをやめた。
d' (?)体に良くないし、太郎はタバコをやめた。

「カラ・ノデ」であれば、人称の制限はない。

- (13)" a 時間がなかった{から/ので}、彼はそこには立ち寄らなかった。
b あれはもうボロボロだった{から/ので}、あいつ捨てちゃったよ。
c 主張もしっかりしてた{から/ので}、彼女は彼に投票した。
d 体に良くない{から/ので}、太郎はタバコをやめた。

このように、後句が確定的な事態の描写的叙述になっている場合でも、無意志的であったり、状態性であったりするような事態の叙述の時には、「シ」の文は成り立ちにくいのであるが、意志性のあるような事態の叙述であって、しかもその事態が一人称のものであれば、「カラ・ノデ」の文と同じように、「シ」の文は自然に成り立つのである。

3.3. 後句が感動や詠嘆を表しているような場合

以上見てきた考察では、「カラ・ノデ」を用いれば文として自然に成り立つのに、「シ」であれば不自然になってしまう場合がある、という現象が見られたが、今度は逆に、「シ」を用いた方が「カラ・ノデ」を用いるよりも文として自然に成り立つ場合がある、ということを見ていくことにする。

話し手の感動や詠嘆などの気持ちを表現する場合、先にも見たように情意形容詞や評価形容詞などでも表されるが、そういった明確な形式を述語に置かなくても、話し手の感動や詠嘆の気持ちが表現される場合がある^{注10}。そのような場合、「シ」を用いた文の方が自然であるが、「カラ・ノデ」を用いた文だと不自然に感じられる。

- (14) a 雪も降ってきた|し/??から/??ので|、ようやく冬らしくなってきたなあ。
- b いつまで経ってもその癖は直らない|し/??から/??ので|、全く困った奴だなあ。
- c 先生にこっぴどく叱られちゃう|し/??から/??ので|、今日は最悪の日だよ。
- d 家賃は三万円だ|し/??から/??(な)ので|、なんていい物件なんだ！
- e 彼は礼儀正しい|し/??から/??ので|、なんときちんとした若者なんでしょう。
- f そう言えば、レポートの提出明日だった。まだ全然手をつけてない|し/??から/??ので|、どうしよう。

このように、後句が感動や詠嘆を表現しているような場合には、「カラ・ノデ」を用いた文よりも「シ」を用いた文の方が自然な感じになるのである。

4. 「シ」の文の前句に対して後句と共起関係が生じる理由について

以上で見てきたように、「シ」の文において、前句に対する幾つかの後句との共起関係が見られたのであるが、それでは、なぜそのような共起関係が「シ」の文において見られるのか、以下で考えてみることにしたい。

まず結論から先に述べると、そのような「シ」の文において見られる共起関係は、「シ」の持つ並列性と文的独立性の高さに起因するものである、ということになる。

4.1. 本稿で考察対象としてきた現象について

前節まででは特に触れてこなかったのであるが、次のような計算的、法則的な因果関係になっている文には、そもそも「シ」を用いることができない。

- (15) a 三角形の内角の和は180度だ|*し/から/(な)ので|、計算するとここの角度は30度になる。

- b 定価が一万円だ{|*し／から／(な)ので|、消費税込みで一万五百円だ。
- c 地球には大気がある{|*し／から／ので|、空が青い。
- d 引力がある{|*し／から／ので|、リンゴが落ちる。

(15)のような計算的、法則的な因果関係になっているものは、そもそも前句の事態と後句の事態とが一對一の対応関係になっており、後句の事態の原因・理由は前句の事態でしかあり得ないというような関係になっている。つまり、「シ」の文はこのようない対一対応の因果関係の表現には使えないのである。2節で見た先行研究でも、「シ」を用いた原因・理由表現は、他にも原因や理由があるということを暗示させ、婉曲的なニュアンスを持つということが指摘されていたのであるが、これは逆の言い方をすると、「シ」を用いた原因・理由表現の文は、他にも原因や理由がないと、すなわち複数の原因や理由がないと原因・理由表現の文として成り立たないということになるであろう。このことの証拠として、その他に、「シ」の文の前句には合説性の係助詞「モ」が使われやすいということも挙げられる。

- (16)a 雨も降っているし、今日は中止にしよう。
- b 雨が降っているし、今日は中止にしよう。
- (17)a 上手に歌も歌うし、あいつはカッコいいな。
- b 上手に歌を歌うし、あいつはカッコいいな。

(16)のaとbとを比べると、相対的にはあるが「モ」の使われているaの方がより自然に感じられる。(17)も同様にaの方がより自然に感じられる。もちろん、必ずしも「モ」を使っていなければならないということではなく、「モ」が使われていなくても、前句で述べられている事態がまだ他にもあると読み取ればかまわないわけであるが、それでも「モ」が使われてあれば、他にもまだ原因・理由となるべき事態があるということが読み取りやすくなるのである。このように「シ」の文には係助詞「モ」が馴染んで使われやすいのであるが、これは、係助詞「モ」の持つ合説性によって、他にも原因や理由となるべき事態がまだあることを示しやすくするからなのである^{注11}。もっとも、「シ」は並列関係を表すのにも用いられるのであるから、以上のような現象が見られるのも当然のことであろう。事実、本稿では今まで「シ」を一つ用いただけの原因・理由表現についてしか考察してこなかったが、実際には「シ」を複数用いた原因・理由表現もあるのである。

- (18)a 雨も降っているし、風も強いし、今日は中止にしよう。
- b 上手に歌も歌うし、踊りも踊るし、MCもきまってるし、あいつはカッコいいな。

- c 夢の記録を続けていると、どうしても睡眠が浅くなる。“すぐに目醒めて記録をしなくては”そんな意識が働くからにちがいない。よいアイデアは浮かばないし、睡眠不足にはなるし、間もなくこの記録はやめてしまった。

（「食卓」・80,81 ページ）

やはり、「シ」を用いた文が原因・理由表現の文として自然に成り立つためには、そもそも他にも幾つかの原因・理由となるべき事態がなければならぬのであろう。

しかし、3節を中心に今まで見てきたように、「複数の幾つかの原因・理由がなければ「シ」を用いることができない」というような制約だけでは捉えられない現象が見られるのである。

- (19) a ここにいると危ないし、周りの迷惑にもなるし、ここをどいた方が良さそうだ。
b ここにいると危ないし、周りの迷惑にもなるし、ここをどきましょう。
c ここにいると危ないし、周りの迷惑にもなるし、そこをどいたらどう？
d ? ここにいると危ないし、周りの迷惑にもなるし、そこをどいて。
e ?? そこにいると危ないし、周りの迷惑にもなるし、そこをどけさせられた。
f そこにいると危ないし、周りの迷惑にもなるし、私はそこをどきました。
g (?)そこにいると危ないし、周りの迷惑にもなるし、彼はそこをどきました。
- (20) a 虫も入って来るし、窓を開めた方がいいだろう。
b 虫も入って来るし、窓を閉めようぜ。
c 虫も入って来るし、窓を開めた方がいいんじゃない？
d ? 虫も入って来るし、窓を閉めてください。
e ?? 虫も入って来るし、窓が閉められてある。
f 虫も入って来るし、僕は窓を開めた。
g (?)虫も入って来るし、花子は窓を開めた。

(19)も(20)も複数の幾つかの原因・理由があると読み込めるのであるが、それでも(19)dと(19)eと(19)g、(20)dと(20)eと(20)gは他の文に比べて許容度が低いのである。この許容度の低さはむしろ後句の特徴に関係してくるものであると考えられるのである。そこで本稿では、「シ」の文の前句が、どういう特徴を持った後句と共起し、どういう特徴を持った後句とは共起しないのか、という前句と後句の共起関係に着目して、考察を行ってきたわけである。

つまり、後句が、事態をめぐっての判断(認識的判断、当為的判断、評価・感情、意志・希望)を表していたり、話し手の感動や詠嘆を表していたり、あるいは一人称で意志性のある事態の叙述になっていたりする場合には、「シ」の文は自然な感じの原因・

理由表現の文として成り立つのであるが、後句が相手に対する行為要求を表していたり、無意志的、状態的な事態の叙述になっていたりする場合には、「シ」の文は原因・理由表現の文として不自然な感じの文になってしまう、ということを見つけたのである。

4.2. 「シ」の持つ並列性と文的独立性の高さ

このような共起関係が生じるのは、一つには「シ」の持つ並列性によるものであると言える。「シ」は並列関係を表すのにも用いられるのであるが、並列関係である以上、並べられたそれぞれが、同次元の中でお互いに共存関係になっているものでなければならない。この世の中にはありとあらゆるいろいろな事態が存在しており、それらはもともと一つ一つ独立した事態として存在しているのであるが、それらの事態をわざわざ並列にして並べるとということは、それぞれの事態がお互いに共存関係にあるのだという話し手の意識や認識のもとで事態が並べられていることになるわけであるから、その話し手の意識や認識が一体どういうものであるのかがその並列関係から読み取れることになる。そして、そのような話し手の意識や認識があるからこそ、そのように意識したり認識したりすることの具体的な結果として、その意識や認識が話し手の何らかの主張や見解となって出てくることにもなるのである。

- (21)a 駅前のラーメン屋のラーメンは、麺にコシはあるし、スープのだしもきいてるし、チャーシューも分厚い。
- b うちのリーダーは、やる曲も一人で勝手に決めてしまうし、全部自分でヴォーカルをやるし、気に入らないメンバーはすぐにくびにしまう。

(21)aであれば、ただ単に「駅前のラーメン屋のラーメン」についてその特徴を並べているというよりも、「駅前のラーメン屋のラーメンは実に食べごたえがある」というようなことについて、その「食べごたえがある」ということの側面となるような事例を並べているような感じを受け、そしてさらには、「あそこのラーメンは最高だ」といったような話し手の見解も読み取ることができる。また(21)bも、「うちのリーダー」についてただ単にその時々様子や行動を並べているというよりも、「うちのリーダーは横暴な人間である」というようなことについて、いろいろと具体的な事例を並べているような感じがし、さらにそこから「あいつは嫌な奴だ」といった話し手の見解も読み取ることができる。

(21)aは、「麺にコシがある」「スープのだしがきいている」「チャーシューが分厚い」という本来それぞれ独立に単独で存在している事態(確かにそれぞれの事態はお互いに関連があって、それゆえに既に同次元で共存しているように思えるが、それはたまたま対象の側にそのように思わせる体制があるのであって、それぞれ事態としては個々の

様態を持って単独で独立して存在しているものなのである)を一つのまとまりにして並べていて、同様に(21)bも、「やる曲を一人で勝手に決めてしまう」「全部自分でヴォーカルをやろうとする」「気に入らないメンバーをすぐにくびにしてしまう」というこれまた本来単独で独立して存在している事態を一つにまとめ上げて並べている。だが、そのようにもともと単独で独立して存在している事態をわざわざ一括りにしてまとめ上げている以上、その根底には、「駅前のラーメン屋のラーメンは実に食べごたえがある」とか「うちのリーダーは横暴な人間である」といったような話し手の意識や認識が必ずあるのであり、そのような話し手の意識や認識があるからこそ、具体的に話し手の事態をめぐっての主張や見解を読み取ることができるのである。そして実際に、幾つか並べた後に、話し手の見解や主張が句となって表面化することもあるのである。

- (21)' a 駅前のラーメン屋のラーメンは、麺にコシはあるし、スープのだしもきいてるし、チャーシューも分厚いし、最高だよ。
 b うちのリーダーは、やる曲も一人で勝手に決めてしまうし、全部自分でヴォーカルをやろうとするし、気に入らないメンバーもすぐにくびにしてしまうし、本当に嫌になっちゃうよ。

つまり、「シ」を用いた文で原因・理由表現になっているものというのは、「シ」によって幾つかの事態を並べる際に、それぞれの事態を共存関係にあるものとして一つにまとめあげようとする話し手の意識や認識が必要となるのであるが、そのような話し手の意識や認識が結果として具体的な話し手の主張や見解となって表れて、それが後句に表現されたものなのである。

しかし、以上で述べてきたことは、何も「シ」だけについて言えることなのではなく、並列を表す他の幾つかの助詞についても言えることなのである^{注12}。

- (22) a この家は、庭もついていて、見晴らしも良くて、海にも近くて、|なんて贅沢なんだろう。|大変すばらしいよ。|
 b 味はまずいわ、値段は高いわ、店の中は汚いわ、店員の態度は悪いわ、|あの店はちょっとひど過ぎるよ。|もう最悪だね。|
 c この時期は、雨も降ったり、風も強く吹いたり、|全く嫌な時期だ。|もう大変だよ。|
 d 音楽をやっているのもいれば、演劇活動に力を入れているのもいれば、路上パフォーマンスをやる奴もいれば、|いろいろと面白い連中が集まってるよ。|本当に個性的な集団だね。|

(22)では「テ」と「ワ」と「タリ」と「バ」を取り上げたが、どの助詞もそれを用いて事態を並べていくと、やはり話し手の見解や主張が読み取れて、実際に後句には話し手の見解や主張(具体的には話し手の感動や詠嘆の気持ち)が表現されるのである。

ところが、「テ」や「ワ」や「タリ」や「バ」などは、それらを用いて事態を並べていっても、後句には、話し手の感動や詠嘆の気持ちが表現されても、「シ」とは違って認識的判断や当為的判断、意志・希望などは表現されることはない。

(23)a この家は、庭もついていて、見晴らしも良くて、海にも近くて、{??きつと住んでる人は大金持ちに違いない。／*一度は住んでみたい。／*今度訪ねて行ってみたら?}

a' この家は、庭もついているし、見晴らしも良いし、海にも近いし、{きつと住んでる人は大金持ちに違いない。／一度は住んでみたい。／今度訪ねて行ってみたら?}

(24)a 味はまずいわ、値段は高いわ、店の中は汚いわ、店員の態度は悪いわ、{*たぶんじきにつぶれてしまうでしょう。／*もう二度とあの店には行かないぞ。／*あそこには行かないほうがいい。}

a' 味はまずいし、値段は高いし、店の中は汚いし、店員の態度は悪いし、{たぶんじきにつぶれてしまうでしょう。／もう二度とあの店には行かないぞ。／あそこには行かないほうがいい。}

(25)a この時期は、雨も降ったり、風も強く吹いたり、{*外出する人は少ないかもしれない。／*外出は控えておこう。／*遠足はまたの機会にしない?}

a' この時期は、雨も降るし、風も強く吹くし、{外出する人は少ないかもしれない。／外出は控えておこう。／遠足はまたの機会にしない?}

(26)a 音楽をやっているのもいれば、演劇活動に力を入れているのもいれば、路上パフォーマンスをやる奴もいれば、{*クラスの雰囲気もさぞかし面白いんだろうな。／*俺達も何かやってみたいね。／*あなたも好きなことをやっていいんですよ。}

a' 音楽をやっているのもいるし、演劇活動に力を入れているのもいるし、路上パフォーマンスをやる奴もいるし、{クラスの雰囲気もさぞかし面白いんだろうな。／俺達も何かやってみたいね。／あなたも好きなことをやっていいんですよ。}

何か事態を並べていくことによって、その後句で話し手の何らかの主張や見解(特に具体的には、感動・詠嘆)が表現されるのは、「シ」に限らずその他の幾つかの並列を表す助詞でもあり得ることなのではあるが、他の並列を表す助詞とは違って、「シ」を用いた文では後句で、認識的判断や当為的判断、意志・希望、勧誘・提案などまでもが自

分の主張や見解として表せるのである。このように、「シ」を用いた文の後句に認知的判断や当為的判断、意志・希望などの表現が来るのは、「シ」によって並べられるそれぞれの句の文的独立性が高いことによるのである。

2節でも見たが、既に南(1974)(1993)で指摘されている通り、「シ」はC類で階層が高く、つまり「シ」の句の内部には主題の「ハ」やモダリティに関わる要素などが現れることができるのであって、ゆえに「シ」によって並べられているそれぞれの句はそれだけで単文相当の資格を持っており、文的独立性が高いことになるのである。

何か判断を行ったり、意志や希望を持ったり、提案や勧誘をしたりするには、それなりの然るべき根拠がなければならぬのであるが、そこに存在している(話し手の知覚に入ってくる)現実の事態をしっかり捉え、その事態が一体どういうものであるのかを十分に自分自身で把握し踏まえた上でないと、そもそも判断を行ったり、意志や希望を持ったりすることはできない。つまり、根拠となるべき事態というのは、話し手が自分でそう捉えた(認知した)現実そのものの事態(言語的にはテンスやモダリティまでもが表現されている事態)でなければならぬのである。そういうわけで、「シ」によって並べられるそれぞれの句は、文的独立性が高く、話し手によって現実に捉えられた事態(話し手によって認知された事態)をそのままそこに表すことができるので、判断や意志・希望などの根拠として表すのに適しているのである。

以上のことからまとめてみると、「シ」の文における前句に対する後句の共起制約に関しては次のようなことが言える。「シ」によって幾つかの事態を並べていくということは、その根底には、そのように複数の事態が共存関係にあって一まとまりになっているのだという話し手の意識や認識があるのであり、そういった意識や認識があるからこそ結果として具体的な話し手の主張や見解が出てくることになる。そしてそれゆえに、後句には話し手の主張や見解に関するものしか表現されないことになり、後句には話し手の主張だとか見解などとは無関係である確定的な事態の叙述が来ることはないのである。また、後句では相手に対する行為要求も表現できにくいのであるが、それは行為要求表現というものが、ディオントックな表現効果が出てくる場合を除いては、そもそもある行為を遂行することを相手に指示しているのみであり、ただ単に相手に対して働きかけるという側面が強いものであることによるのである。つまり、行為要求表現は、平叙文のようにある主語に対して「かくかくしかじかである」と述べているのではなく、あくまでもある行為を遂行させようとしてその行為内容を発話の現場で示しているのみであって、話し手の主張や見解といったものではないのであるから、ディオントックな表現効果が出ない限り後句で表現されることは難しいのである。

しかしそれでも、確定的な事態の叙述であるのにもかかわらず、その事態が意志性のある事態であれば「シ」の文の後句で表現されることがあるのであるが、それはなぜなのであろうか。次の節で考えてみることにしたい。

4.3. 意志性のある事態

確定的な事態の叙述であるのに、意志性のある事態であれば、モダリティに関わる表現と同じように「シ」の文の後句に来ることができるのであるが、それでは同じ確定的な事態であっても、無意志的、状態性であるような事態と意志性のあるような事態とは一体どのような違いがあるのであろうか。ここでは特に意志性のある事態について考えてみることにしたい。意志性のある事態というのは、具体的には意志的な動作行為の事態のことをいうわけであるが、そこで、まず意志的な動作行為について考えてみることにしたい。

ある行為を行うか行わないか、あるいは行為を行うにしてもどういう行為を行うのかは、そもそも本人の意志に委ねられているわけであるが、その本人の意志によって行為を行うか行わないかが決定され、それに基づいて実際に行為を行ったりあるいは行わなかったりするものである。現実には実現されているある動作行為の事態(実際に遂行された動作行為はもちろんのこと、実際には遂行はされなかったが、遂行されなかったという点において現実には結果としてそのように存在している事態も含めて)は、その当の本人が「そうしよう」「そうするのだ」と思って、つまり自分の意志でそのように決断して実際に「そうした(あるいはそうしなかった)」ことなのである。結局は、意志性のある事態というのは、「そうしよう」「そうするのだ」という本人の意志に基づいた事態なのであって、まさにその本人の意志が現実には具体化し、実現化した事態なのであると言える。また、そもそも意志というものは、それ自体、その当の本人個人の主張や見解なのであるから、その本人の意志が具体的に実現した動作行為の事態には、その本人個人の主張や見解が結果的に反映されていることにもなる。我々は意図的にわざわざ無意味な行為を行うはずはなく、常に意識の中で自分自身で責任を持って意味のある行為を行っているのであるから、意志的な動作行為の事態にその本人個人の主張や見解が反映されるのも当然のことであろう。そういうわけで意志性のある事態は、確定的な事態であっても、意志という話し手の主張や見解に基づいた事態なのであるから、「シ」の文の後句に表現できるのである。

またさらに、意志性のある事態であっても、人称は一人称の方がより自然な感じになるということ(13)'を見てきた(以下に(13)'を再掲)。

- (27)a 時間がなかったし、私はそこには立ち寄らなかつた。
a' (?)時間がなかったし、彼はそこには立ち寄らなかつた。
b あれはもうボロボロだつたし、俺捨てちゃつたよ。
b' (?)あれはもうボロボロだつたし、あいつ捨てちゃつたよ。
c 主張もすっかりしてたし、私は彼に投票した。
c' (?)主張もすっかりしてたし、彼女は彼に投票した。

- d 体に良くないし、僕はタバコをやめた。
d' (?)体に良くないし、太郎はタバコをやめた。

「シ」を用いて幾つかの事態を並べる場合、並べられるそれぞれの事態がお互いに共存関係にあるのだと意識したり認識したりするのはまさに話し手自身なのであり、その意識や認識が具体的に主張や見解となって表れる場合、その主張や見解はまさに話し手自身の主張や見解になるのであるから、「シ」の文の後句で述べられる意志性のある事態というのも、必然的に話し手自身すなわち一人称の事態ということになるのである。

5. まとめ

以上、述べてきたことをまとめる。前句に対する後句との関係に着目すると、次のようなことが言える。

- (イ) 後句がモダリティに関わる表現になっている場合、「カラ・ノデ」の文と同じように、「シ」の文も基本的には自然に成り立つが、相手への行為要求表現になっている場合は、「シ」の文は不自然な感じになってしまう。
- (ロ) 相手への行為要求表現であっても、そこにディオントックな表現効果が見られたり、勧誘や提案の表現であれば、「シ」の文は自然な文として成立する。
- (ハ) 後句が確定的な事態の描写的叙述になっている場合、無意志的な事態の叙述であると「シ」の文は成り立ちにくい、意志性のある事態の叙述であれば「シ」の文は自然に成り立つ。ただしその場合でも人称は一人称の方が自然である。
- (ニ) 後句が話し手の感動や詠嘆の気持ちを表しているような場合、「カラ・ノデ」よりも「シ」を用いた文の方が自然である。

そして、このような前句に対する後句との共起関係が生じる理由は、「シ」が持っている並列性と文的独立性の高さによるものである、と説明できるのである。

注

注1 「並列関係」、「単純接続」、「累加関係」、「因果関係」のそれぞれ具体的な用例は、張(1994)によると以下のようなものになる(以下の用例は張(1994)からのもの)。

- (a) 「並列関係」になっているもの
・ 仕事もつまらないし、収入も少ない。

(b-1)「単純接続」で前句・後句の事態が無関係になっているもの

- ・めぐみは亭主と別れて、家に戻ってこなかったし、きょうハンガリからの留学生が来た。(宮本輝(1992)『彗星物語』角川書店)

(b-2)「単純接続」で話題の転換をしているもの

- ・私は別に反対するわけではないし、ああ、お腹がすいた。

(c)「累加関係」になっているもの

- ・(倉田くんなんか)英語の単語でも、数学の公式でも、なんでもかんでも、苦労せんまに自然に憶えられるし、それをまた簡単に応用できるんや。

(宮本輝(1992)『彗星物語』角川書店)

(d)「因果関係」になっているもの

- ・敗戦日本は乗用車などは使えないし、必要な量だけ輸入すればよい。

(日産プリンス陸会(1991)『プリンスの思い出』日産自動車販売(株))

注2 阿部(1985)や国立国語研究所(1951)、倉持(1971)などが、このような指摘をしている。

注3 南の階層構造の説を修正した田窪(1987)でも、「シ」はC類に位置付けられている(ただし、「カラ」は「行動の理由」と「判断の根拠」の2つに分けられ、「行動の理由」の「カラ」はB類に、「判断の根拠」の「カラ」はC類に位置付けられている。また、「ノデ」はC類に位置付けられている)。

注4 本稿では「カラ・ノデ」と「シ」の対立として捉えるので、「カラ」と「ノデ」の違いは特に問題にしない。

なお、「カラ・ノデ」と「シ」の対立として捉えるとしたが、今回は「シ」の方に考察の主眼を置いているので、「カラ・ノデ」の特徴は詳しくは考察しない。

注5 なお、以下では、単独で「シ」と言っても、その「シ」は原因・理由表現に関わっている「シ」ということで、考察を進めていく。

注6 この用例は、国立国語研究所(1951)からの引用である。

注7 それでは、なぜ前句の述語が「ノダ」になっていると許容度が上がるのだろうか。「ノダカラ」に関する論考ではあるが、田野村(1990a)や野田(1995)などの先行研究で指摘されているように、前句の述語が「ノダ」になっていると(すなわち「ノダカラ」になっていると)、後句で述べられていることが「当然のことだ」とか「必然的なことだ」とかいうような意味を帯びるようになり、話し手の判断が必然的なものであることを表すようになる。そして、特に後句が相手に対する行為要求表現になっている場合には、「話し手の一方的な姿勢」(田野村(1990a))が感じられたり、「非難のニュアンス」(野田(1995))が生じたりするということが指摘されている。つまり、相手に対する行為要求表現であっても、「ノダカラ」の文になっていると、単なる行為の要求をしているというよりは、話し手のディオントックな当為的判断を表しているということになるであろう(これは逆の言い方をすると、話し手のディオントックな当為的判断が感じられない場合には、「ノダカラ」の文は成り立ちにくくなるということになる)。

(a) おーい、お小遣いやる {??んだから/から}、こっちに來なさい。(≠こっちに來るべきだ。)

(b) 喉渴いた {??んだから/から}、何か買ってきて。(≠何か買ってくるべきだ。)

(c) もう二十歳過ぎてる {んだから/*から}、そんなこと自分でやんなさい。(=そんなこと自分でやるべきだ。)

(d) 苦勞して買ってきた|んだから/*から|、大事に取っておけよ。(=大事に取っておくべきだ。)

以上は「ノダカラ」に関する論考であったが、こういったことは「ノダカラ」だけに言えることではなく、田野村(1990a)も「ノダシ」について「[のだから]と同じように、「～である以上、当然、～」といった意味を表す」と述べているように、「ノダシ」についても同じことが言えるであろう。すなわち、「ノダシ」になっていると、後句が行為要求表現になっていてもそれが話し手のディオントックな当為的判断として感じられることになり、3.1.1節で見てきたような事態をめぐっての話し手の判断と同じになる。従って、「シ」の文の前句が「ノダ」述語になっていると、許容度が上がるのである。

注8 (7)のような場合、ただ単に相手に行為を要求しているだけであり、つまりある行為の遂行を相手に指示しているのみであり、単なる相手への働きかけとしての側面が強い。ところが、(8)や(9)のような場合は、確かに同じく相手に対する行為要求の表現ではあるけれど、ただ単に行為を要求しているというよりは、注意や警告、忠告といった話し手の意見・見解を述べている(ディオントックな当為的判断)という側面が強い。つまり、(8)や(9)の方は事態をめぐっての話し手の判断という側面があることになる。そこで、(8)や(9)の場合は3.1.1節で見てきた考察に準じて考えることができるのである。

注9 もちろん三人称であっても、そこに話し手の視点が置かれれば自然になる。しかし、それでもやはり一人称の方が相対的に自然な感じになるであろう。

注10 先に見た情意形容詞述語文や評価形容詞述語文は、「こういう感情だ」とか「こういう評価だ」とかいうように、断定的にきっぱりと感情や評価を述べるような文であったが、ここで考察しようとしている感動や詠嘆の表現というのは、ある事態を感慨をもってしみじみと語るような表現のことである。

注11 ただし、「モ」と「シ」との関係については既に寺村(1984)などで指摘されている。

注12 もちろん、「シ」以外の並列を表すその他の助詞についてももっと詳しく考察する必要がある。特に「テ」などは今後の課題としておきたい。

参考文献

- 阿部八郎(1985) 「接続助詞」『研究資料日本文法7 助辞編(三) 助詞・助動詞辞典』明治書院
- 井島正博(1994) 「語用論から見た命題の類型」『成蹊国文』27
- 伊藤勲(1990) 「[し]の用法」『国際学会友会日本語学校紀要』13
- 大鹿薫久(1986) 「[て]接続考」『叙説』12 奈良女子大文学部
- 大鹿薫久(1987) 「文法概念としての「意志」」『ことばとことのは』4 和泉書院
- 大鹿薫久(1989) 「感動文の構造(承前)一句と文についての把握—」『ことばとことのは』6 和泉書院
- 尾上圭介(1986) 「感嘆文と希求・命令文—喚体・述体概念の有効性—」『松村明教授古希記念・国語研究論集』明治書院
- 川端善明(1976) 「用言」『岩波講座日本語6 文法1』岩波書店
- 倉持保男(1971) 「し」の項 松村明編『日本文法大辞典』明治書院

- 国立国語研究所(1951) 『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』 秀英出版
小林幸江(1994) 「接続助詞「し」の文論的考察」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 20
- 鈴木浩(1990) 「接続助詞「し」の成立」『文芸研究』 64 明治大学文学部
田窪行則(1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』 6 - 5
田野村忠温(1990a) 『現代日本語の文法 I — 「のだ」の意味と用法—』 和泉書院
田野村忠温(1990b) 「文における判断をめぐって」『アジアの諸言語と一般言語学』 三省堂
張素芳(1994) 「接続助詞「し」の用法と意味」『文芸研究』 135 東北大学文学部国語学国文学研究室内
寺村秀夫(1984) 「並列的接続とその影の統括命題—モ、シ、シカモの場合—」『日本語学』 3 - 8
- 永野賢(1952) 「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』 29 - 2
仁科明(1998) 「「ので」の諸相—性格把握の前提として—」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』 汲古書院
- 野田春美(1995) 「「のだから」の特異性」仁田義雄編『複文の研究(上)』 くろしお出版
益岡隆志(1997) 『複文』 くろしお出版
南不二男(1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店
南不二男(1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
森重敏(1955) 「接続助詞の分類」『国語国文』 24 - 2
森田良行(1984) 『基礎日本語 3』 角川書店
ヤコブセン・W・M(1990) 「条件文における「関連性」について」『日本語学』 9 - 4
山田孝雄(1922) 『日本口語法講義』 宝文館
吉田金彦(1970) 「接続助詞」『国文学 解釈と鑑賞』 至文堂
渡辺実(1971) 『国語構文論』 塙書房
Sweetser, Eve E. (1990) “From Etymology to Pragmatics” Cambridge University Press

用例出典

- 「死者」 : 赤川次郎(1986)『死者におくる入院案内』 新潮文庫
「シングル」 : 落合恵子(1986)『シングルガール』 集英社文庫
「ひかり」 : 西村京太郎(1990)『ひかり 62号の殺意』 新潮文庫
「食卓」 : 阿刀田高(1989)『食卓はいつもミステリー』 新潮文庫
「解体新書」 : 群ようこ ほか(1998)『群ようこ対談集 解体新書』 新潮文庫

(1999年9月16日 受理)